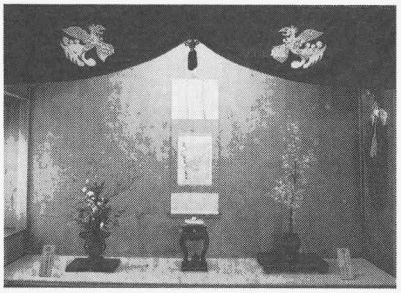
創流270年記念 第93回 創美流華道展

コロナ克服し節目祝う

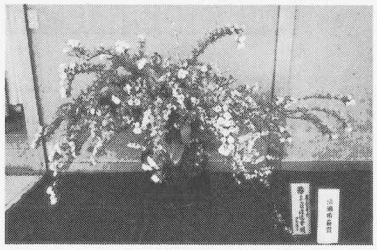
状況に負けない作品、心意気

創流270年記念―第93回創美流華道展が3月21日、東京・東久留米市の創美流華道会館で開催された。主宰＝創美流華道家元十五世・渡邊華靖氏。主催＝創美華道会。後援＝東久留米市、東京新聞。協賛＝株式会社ミライエ、日舞創舞流、創美流華道後援会、茶道脩静庵。

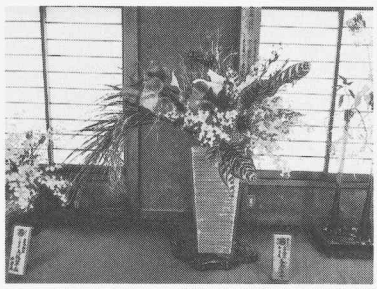
創美流で流祖と仰ぐ初代は嵯峨天皇の皇子源融公を始祖と仰ぐ東根渡邊氏四十七代の元熙宗興で、幕末長州に焼かれたその傷跡も生々しく元熙宗興筆になる瓶花図が伝えられている。寛延三年六月十三日写之と書かれているこの図は、元熙五代の孫五十二代元韶翠山の手によって、長州兵に焼かれた由の添え書きと共に軸巻として家元に蔵されている。華道史料として明らかに東日本最古の資料でもある。創流は長く不明であったが、四十七代当主の描いた絵が残っており、そこに記されている寛延3（1750）年6月13日が文献上もっとも古いため、現在ではこれをもって創流元年としている。



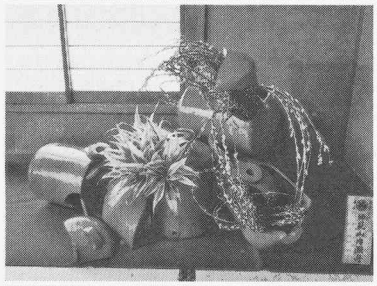
渡邊家伝来の流祖鴻雲齋宗興自筆の瓶花の図が掛けられた床の間に家元・渡邊華靖（右）、副家元・渡邊華璋の作品



家元嗣・渡邊華闡（清瀬市長賞）



大島溪舟



山内灝舟

岡田鳳梢（東久留米市長賞）

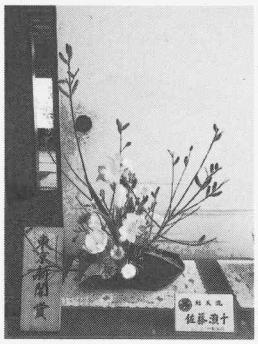
そんな創美流華道が昨年、創流270年の節目を迎えて恒例の10月の流展での記念展の準備を進めていたところ、新型コロナウイルス感染が拡大して早々に延期を決め、このたびの3月開催となった。しかし、年明けには新型コロナウイルス感染の第3波といわれる拡大により首都圏1都3県などに2度目の緊急事態宣言が発令され、収束傾向が鈍く宣言の延長などもあり、いけばな界のイベントは依然として停滞しているといわざるをえない。だが、創美流華道では昨年7月に涼風七夕いけばな展を無観客開催した経験をいかして、今展を会期1日で関係者のみではあったが、感染症防止対策を万全にして開催に踏み切った。涼風七夕いけばな展の模様は動画で配信されていて今回の記念展も後日、配信を予定しているということなので、皆さんもご覧になってみてはいかがでしょうか。

今回の記念展は床の間に家元・渡邊華靖の山茱萸の古典花と副家元・渡邊華璋の松・こでまり・椿の新生花をはじめ、座敷席に家元嗣や幹部の大作、台席に小作と一角には大学生から小学生までの学生・子供の作品が出品された。また、茶道脩静庵による添釜では高校生による点前などがあり、関係者が訪れるたびに一服のお茶を振る舞っていた。そして、出品された作品は審査され最優秀賞の家元賞をはじめ東久留米・東大和・東村山・清瀬・西東京の各市長賞、学生・子供部門の東京新聞賞がそれぞれ選ばれた。

延期され規模を縮小して行われた記念展ではあったが、出品された作品はどれも見応えのあるものだった。節目の花展ということで大勢の人の目に触れてほしかっただろう。ただ、コロナ禍でほとんどのイベントが開催を見合わせているにもかかわらず、夏の七夕展に続いて開催された今展は目前の会館での開催ということもあるだろうが、この時にしかできない表現を作品として発表した創美流の心意気が強く感じられた。長い歴史の上にある伝花と現在の生活様式に合った自由花や現代いけばなの作品を通して、この厳しい状況にも負けないで挑む姿勢は大いに評価したい。

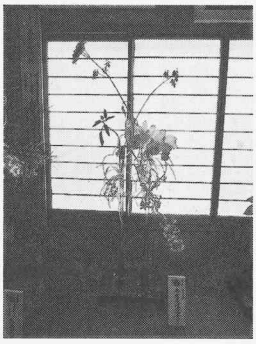
いけばな審査会の各賞の受賞者は次の通り。

家元賞＝小澤窓枝、東久留米市長賞＝岡田鳳梢、東大和市長賞＝杉本彩鳳、東村山市長賞＝渡邊華扇、清瀬市長賞＝渡邊華闡、西東京市長賞＝菅野春祐、東京新聞賞＝佐藤灝千（文中敬称略）。



佐藤灝千（東京新聞賞―学生・子供部門）

小澤窓枝（家元賞―最優秀賞）



渡邊華芳